

## 施設ケアマネジメントにおけるプランニングシートの作成 ～ 介護支援専門員専門研修ツールとしての活用と効果 ～

### The Creation of a Planning Sheet for Use in Institutional Care Management : The Application and Effects of the Planning Sheet as a Tool for Specialized Care Manager Training

相山 馨  
AIYAMA Kaori

#### I はじめに

わが国において、団塊の世代が75歳以上となる2025年には、要介護者の割合が急速に進むことが見込まれている。特に認知症者は2015年時点で約300万人に達し、今後もその増加が見込まれる中、介護支援専門員には要介護状態になっても、その人らしく見慣れた地域で生活し続けることができるような地域包括ケア実践を展開することが求められている。そのため、施設に入所している利用者を支援する場合、施設のケアマネジメントの担い手である施設介護支援専門員には入所前の利用者の過去の生活情報を収集し、自宅や地域で暮らす利用者像を把握することや、利用者が一人の地域住民として自分らしく生活を送れるように支援することが期待されている。そして、このような施設のケアマネジメントの質の向上に対する期待が大きくなるとともに、現状における施設介護支援専門員の資質やその支援体制についても、さまざまな議論が行われるようになった。特に、施設介護支援専門員の専門性を高め、資質を向上させていく手段としての研修は重要な役割をもつものとされ、社会保障審議会等においては、より良質で効果的なケアマネジメントを実践するための研修のあり方について議論が進められているところである<sup>1)</sup>。

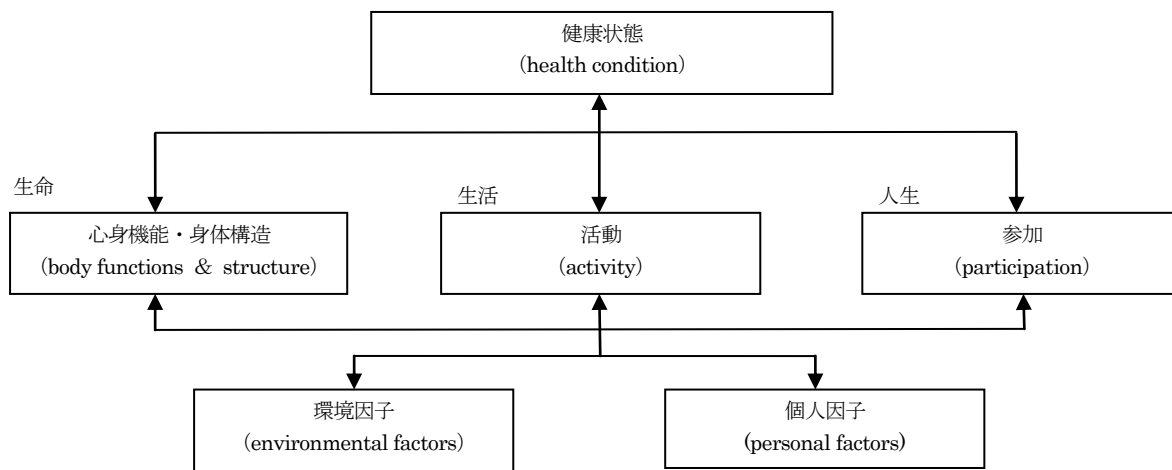
本来、ケアマネジメントとは、利用者の社会生活上の個別的なニーズとそれを充足するためのフォーマル・インフォーマルな社会資源とを結びつけ、利用者自身のもっている強さを引き出しながら、利用者の社会生活における自立と生活の質を高めるものである<sup>2)</sup>。また、このようなケアマネジメントの本質や支援プロセスは、居宅と施設において同様であり、利用者の有する能力に応じた自立支援を目指したケアマネジメントの実践には、本人の意欲や力を引き出し、周囲の環境と関係調整し、支援展開する方法を施設介護支援専門員研修等において、具体的に学ぶことが重要である。

そこで、本稿では、施設介護支援専門員が利用者の生活全体をとらえ、利用者のその人らしさを中核に位置づけながら、多様な社会資源を活用して生活課題を解決することができる展開過程を理解するための施設介護支援専門員専門研修ツールについて検討することを目的とする。

## II ICFモデルの特徴と研修ツールとしての活用性

2003年に、介護支援専門員の研修において保健・医療・福祉の専門職の「共通言語」としてICFモデルが用いられるようになった。それにともない、利用者の生活全体を捉え、包括的な視点を導くICFモデルを活用したアセスメントは現任の介護支援専門員を対象とした様々な研修で導入されるようになった。ICFモデル(図1)は「心身機能・身体構造」(body functions & structure)－「活動」(activity)－「参加」(participation)の三つのレベルからなり、それを包括したものが生活機能である。また、これは「生命」－「生活」－「人生」と言い換えることができる<sup>3)</sup>。ICFモデルの特徴としては、①生活機能(プラス)のなかに障害(マイナス)を位置づけ、利用者・患者のマイナス面や残存機能だけをみるのではなく、適切なケアプランによって「潜在的生活機能」を引き出し実現化するというプラス面を生かし、その際には、特に「活動」(生活)と「参加」(人生)のプラスを向上させることが重要とされていること、②ICIDHでは「疾患」としていたものを、「健康状態」とし、高齢や妊娠、ストレス等を含む広い概念としたこと、③物的環境、人的環境、社会的・制度的環境、実践されているケア等を生活機能や障害に対する環境因子として捉え生活に影響を与える内容として重視したこと、④性別・年齢・ライフスタイル等の個人に起因する固有のものを個人因子として捉えること、⑤心身機能・活動・参加の各生活機能レベルと健康状態・環境因子・個人因子のすべての要素は、それぞれ他の要素と関係し合う相互作用モデルである<sup>4)</sup>ことがあげられる。

図1 ICFモデル



(大川弥生 2004年)

また、利用者の状態を各要素に分類する際には、ポジティブ面とネガティブ面にわけて整理することにより、アセスメント情報の分析の際に要介護の原因や状態をより深く理解することができる。生活機能である「心身機能・身体構造」「活動」「参加」には、それぞれ「心身機能・身体構造の障害」「活動制限」「参加制約」という障害が存在する。この生活機能の発揮の仕方に影響を及ぼす要素に

は「健康状態(変調または病気)」、背景因子である「環境因子」や「個人因子」がある。「環境因子」には自己実現を目指すことを推進する「環境因子(促進因子)」と阻害する「環境因子(阻害因子)」、「個人因子」にも自己実現を目指していくことを大切にする「個人因子(肯定的)」とそれを阻害しやすい「個人因子(否定的)」に整理することができる<sup>5)</sup>。このような細やかな要素に整理し、ICFモデルの相互作用を把握することにより、利用者の生活の全体像を総合的に理解することができるのである。また、健康状態に関する情報や、その人の過去の生活やその固有性をとらえる個人因子の情報、活用できる社会資源を捉えることができる環境因子の情報は、利用者の自立生活支援の実践のための重要なアセスメント情報である。また、ケア実践後、提供されるケアの効果やケアプランの評価するモニタリングにおいてもICFモデルによる相互作用から生活全体を捉えることは、適切なケアマネジメントの展開において有効なツールであると考えられる。

富山県では、2006年度以降、このようなICFモデルを用いたケアマネジメントの展開を施設介護支援員専門研修の演習の中に取り入れてきた。しかし、そこではアセスメント情報をICFモデルで整理することはスムーズにできても、その後のケアプラン作成へと展開する過程であるプランニングにおいて、研修の参加者が躓く場面が多くみられた。つまり、これはICFモデルをアセスメントツールとして活用し、利用者の生活全体や利用者の望む生活を把握しているにもかかわらず、それをプランニングにつなげられないということである。そのため、参加者からは、「ICFでまとめたアセスメントからケアプランにつなげる方法を知りたい」、「実務で一番苦労しているのはケアプランの作成であり、スムーズに立案できるものがほしい」、「ICFでとらえたアセスメントの視点を生かすケアプランを作成したい」といった意見があげられた。そのため、研修に参加しているすべての人がICFモデルにより、その利用者の全体像を捉えた上で、その人らしく生活するためのケアプランへの展開を可能にする「施設ケアマネジメントプランニングシート」(以下プランニングシート)を作成することにした。

### Ⅲ 「施設ケアマネジメントプランニングシート」の作成

プランニングシートの作成にあたっては、施設介護支援専門員専門研修を担当する富山県介護支援専門員協会施設ケアマネジメント企画検討チーム(以下、企画検討チーム)の協力により作業を進めた。企画検討チームのメンバーは、これまで、施設介護支援専門員専門研修の演習でファシリテーターを担ってきた介護老人福祉施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設、認知症対応型共同生活介護(グループホーム)に所属する介護支援専門員5名であり、看護師、社会福祉士、介護福祉士の資格を有する実務経験10年以上のケアマネジメント実践者である。シートの作成にあたっては、研修時でのICFモデルを活用したアセスメントから、プランニングへと展開する際の困難さや、その時に出された参加者の意見を抽出し、躓きの課題を明らかにすることにした。その結果、①ICFモデルで収集したたくさんの情報から、何をみてケアプランを作成すればよいのかわからない、②認知症高齢者の場合、言っていることが本当に望んでいることなのかわからない、③「その人らしさ」がよくわからない、④ICFモデルで情報を集めても、何を優先してケアプランをつくれればよいのかわからない、⑤ネガティブな情報に目がいついてしまい、いつもと同じようなケアプランやケアの内容になってしまう。⑥その人の個別のニーズがとらえにくいといった課題が明確になった。

そこで、作成するプランニングシートは、このような課題を解決できる構成とし、施設サービス計画書の第1表、第2表にスムーズに展開できるツールとして作成することにした。まず、ICFモデルで整理した情報をもとに利用者の生活の全体像を把握した上で、プランニングシートへの展開できる内容とした。まず、その人らしさを支援の柱に位置づけるプランニングシートとして「シート①：その人らしき発見シート」を、次に、その人らしさが発揮できるその利用者固有の生活を明確にし、ニーズを抽出する「シート②：生活課題発見シート」を、最後に、ニーズを解決するための具体的なケアのアイデアを見出す「シート③：その人らしさを活かしたケアのアイデアシート」の3つのプランニングシートを考案した。また、作成したプランニングシートは2008～2010年度の3年間にわたり、実際の研修での実践と検証を行い、各シートの項目や活用の方法について精査を重ねた。作成したプランニングシートは図1～3のとおりである。

図1 その人らしき発見シート

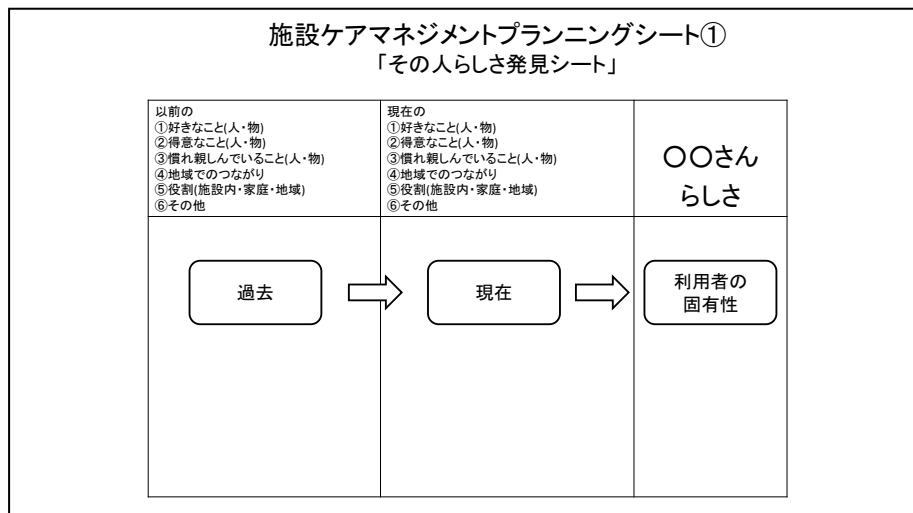


図2 生活課題発見シート

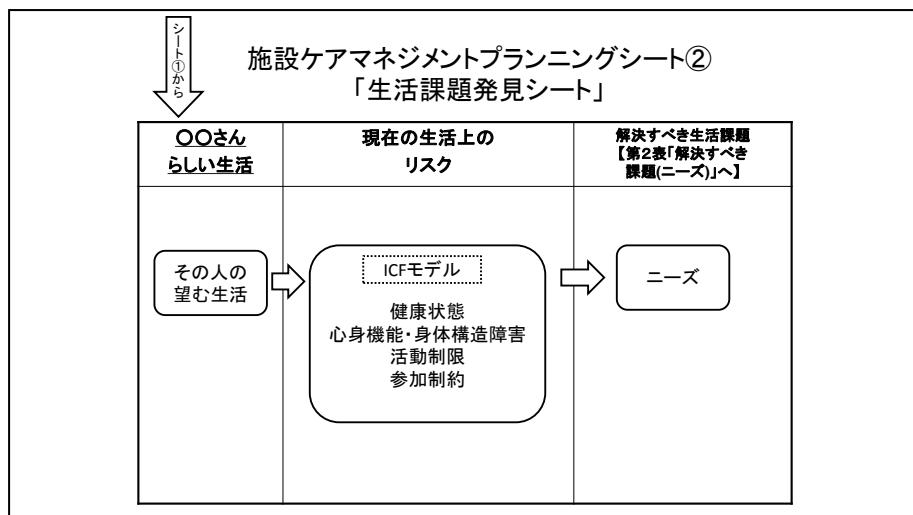
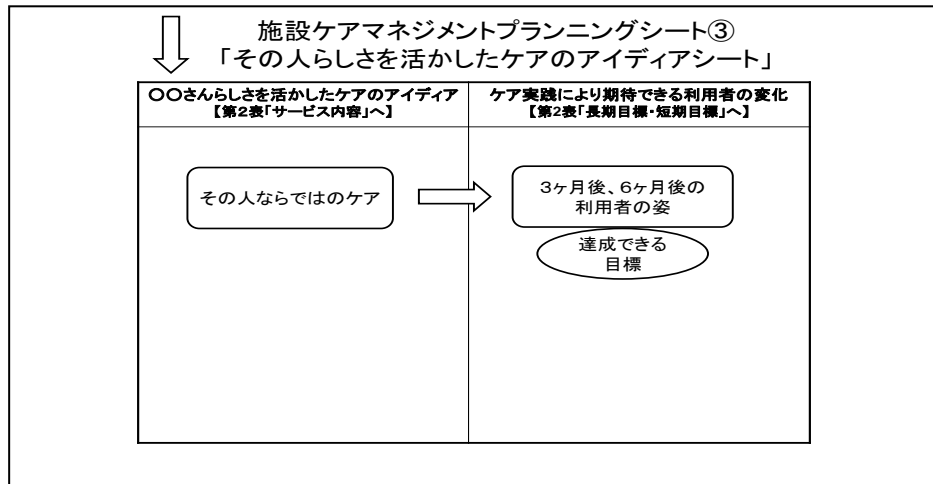


図3 その人らしさを活かしたケアのアイデアシート



各シートの構成と活用方法は、次のとおりである。まず、「シート①：その人らしき発見シート」では、ICFモデルでその利用者の生活の全体像を把握した上で、個人因子の情報を中心に、利用者のその人らしさを捉えるために、「①好きなこと（人・物）、②得意なこと（人・物）、③慣れ親しんでいること（人・物）、④地域でのつながり、⑤役割（施設内・家庭・地域）等」の過去・現在の情報についてICFモデルから転記する。次に、その両方の情報から、その利用者にとってのかけがえのない大切なものにとらえ、「その人らしき」を導き、その利用者の固有性を見出す。また、「シート②：生活課題発見シート」では、まず、「その人らしき」から利用者の望む生活である「その人らしい生活」を導く。次に、その生活を阻む要因をICFモデルの、健康状態、心身機能・身体構造障害、活動制限、参加制約から抽出し、「現在の生活上のリスク」として整理する。そして、要介護でなければ自身の力で実現できたであろう利用者固有の「その人らしい生活」とそれを阻む「現在の生活上のリスク」をすり合わせ、「生活全般の解決すべき課題（ニーズ）」を導く。また、「その人らしい生活」は「第1表：施設サービス計画書（1）」の「総合的な援助の方針」に、そして、抽出された課題（ニーズ）は、「第2表：施設サービス計画書（2）」の「生活全般の解決すべき課題（ニーズ）」に転記する。

「シート③：その人らしさを活かしたケアのアイデアシート」では、「第2表：施設サービス計画書（2）」の「生活全般の解決すべき課題（ニーズ）」を解決するための「〇〇さんらしさを活かしたケアのアイデア」を見出す。このことによって「その人ならではのケア」が明確になり、個別のケアを見出すことができる。また、ここであがったアイデアは「第2表：施設サービス計画書（2）」の「サービス内容」に転記する。そして、それに基づき「ケア実践により期待できる利用者の変化」をあげる。この利用者の変化はケアの実践によって変化した3カ月後、6カ月後の利用者の姿であり、それは達成する目標であるといえる。すなわち、この変化は「第2表：施設サービス計画書（2）」の「長期目標・短期目標」である。このように、プランニングシートに記入した内容は、そのまま転記することで施設サービス計画書（ケアプラン）を作成することができる。

#### IV 施設ケアマネジメントプランニングシート活用後の評価

このように作成したプランニングシートの効果や課題を明確にするために施設介護支援員専門研修の参加者 85 名を対象に、プランニングシートを活用しての利点と改善点について自由記述によるアンケート調査を実施した。調査は集合調査であり、2010 年 8 月の施設介護支援員専門研修終了後に実施した。回答者に対してアンケートは無記名でありその結果は調査以外の目的には使用しないことや回答しないことの自由などを含む倫理的配慮を伝達した。回答は調査対象者全員（回収率 100%）から寄せられた。得られたデータについては KJ 法に準じてカテゴリー化し検討した。自由記述の内容を分析したところ、「プランニング」、「その人らしさ」、「ニーズの把握」、「目標」、「サービス内容」、「新たな気づき」、「活用方法」の 7 つのカテゴリーに分類された。（表 1）なお、（ ）内の数はラベル数を示す。

「プランニング」については、プランニングシートを活用することにより、その人らしいケアプランが作成しやすくなったこと、その人固有のケアプランを作成することができること、ポジティブなケアプランの立案が可能になったこと等、プランニングのしやすさについての意見が大半を占めた。また、ICF モデルでとらえたアセスメント情報を基にプランニングシートを活用することによって、アセスメントからプランニングがスムーズになったことや、ICF モデルとプランニングシートを組み合わせることによって、その人らしさを大切にしたい支援が具体化することが明確になった。しかし、その一方で、ICF モデルからの一連のプロセスには時間がかかることや、ケアプランに基づきサービスを実行した後に活用するモニタリングシートが必要になること等、実務をふまえての課題もあげられた。これは、実践ツールとしてのプランニングシートに対する要望と考えることができる。

また、「その人らしさ」では、プランニングシートが利用者の過去の生活の情報から「その人らしさ」を捉えたり、「その人らしさ」を引き出す方法を導いたりすることができるシートであることが明確になった。そして、利用者の過去の生活を捉えることが「その人らしさ」を見つける上で重要になることが理解できる一方で、過去の生活の情報が少ないとそれを捉えることが難しいということが示された。シート①の項目については、現在、把握している情報にはない場合、利用者や家族から、新たに情報収集していくことが必要になる。介護支援専門員が利用者・家族と一緒にシートを記入することは、改めて利用者の大切なものが理解できたり、かけがえのないものを共通認識したりすることにつながるのではないかと考えられる。

「ニーズの把握」「目標」においては、プランニングシートがニーズや短期目標、長期目標を導きやすいシートであることが明らかになった、また、プランニングシートを活用することで、利用者を個別に捉えるとともに、その固有のニーズを把握できることが示された。これは、その人らしさを中核におきながらニーズを導くことが、他の利用者にはないその利用者固有の個別ニーズを抽出することにつながることを示しているといえる。また、「サービス内容」においては、プランニングシートを活用することにより、その利用者に対する具体的なケアのアイディアがでてくることや、利用者本人の大切なかけがえのない社会資源を活用したケアにつながることを示唆された。また、インフォーマルな社会資源を「サービス内容」にあげることができたことは、現在、施設のケアマネジメントに求められている「地域包括ケアの展開」につながる重要な点であると考えられる。プラン

表1 施設ケアマネジメントプランニングシートの利点と改善点

	利点	改善点
プランニング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケアプランを作成しやすい (12)</li> <li>・その人らしい個別プランが作成できる (8)</li> <li>・利用者本人のニーズからケアプラン作成まで順を追って考えていくことができる (5)</li> <li>・順を追ってシートを活用することで、気づいたらケアプランができていた</li> <li>・ICFでとらえたアセスメントからケアプランへの流れがスムーズにできた (6)</li> <li>・アセスメントからケアプラン作成までの過程をしっかりと整理できる (3)</li> <li>・利用者がケアプラン自分らしくあるためのプランであることがよくわかる</li> <li>・ICFとプランニングシートを組み合わせることで、その人らしさを取り戻すための働きかけや目指す目標がよくみえる。</li> <li>・ポジティブなケアプランを作成することができる (3)</li> <li>・もっとこうしたら楽しんでいただけるのではないかと、と明るいイメージをもってケアプラン作成ができる (2)</li> <li>・利用者のポジティブ面、ネガティブ面がわかりやすい (6)</li> <li>・わかりやすい (6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICFから始めると時間がかかる。</li> <li>・モニタリングのためのシート④がほしい</li> </ul>
その人らしさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その人らしさをみつけやすい (18)</li> <li>・その人らしさを引き出す方法がわかりやすい (6)</li> <li>・シートを使うことで、その人らしさがみえてきた (8)</li> <li>・以前の利用者との現在の利用者をあわせることで、その人らしさがみつけやすい (3)</li> <li>・利用者の強さをみつけやすい (6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・以前の生活歴の情報が少ない場合は、その人らしさがとらえづらい</li> </ul>
ニーズの把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニーズが導きやすい (7)</li> <li>・その人らしさをしっかりあげることで、ニーズが明確になった</li> <li>・利用者の問題を個別にとらえることができた</li> <li>・利用者の個別の希望がみえやすい (3)</li> <li>・利用者の歩んできた歴史から、ニーズを見いだすことができた</li> </ul>	なし
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短期目標、長期目標を出しやすい (3)</li> <li>・シートを進めていくことで、気づいたら短期目標と長期目標ができていた</li> </ul>	なし
サービス内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シート③のケアのアイデアを出すことで、利用者本人の大切な思いやかけがえのない社会資源を活かしたケアプランが立案できた</li> <li>・ケアのアイデアがいろいろとでてくる (2)</li> <li>・細かく具体的にケアについて考えることができる (2)</li> <li>・生活リスクが浮きぼりにされることで、解決に向けたサービス内容を考えることができる (2)</li> <li>・インフォーマルな社会資源をケアプランにあげることができた (3)</li> </ul>	なし
新たな気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者の細かいところに気づくことができた。(5)</li> <li>・今まで気づけなかった視点で利用者の問題に気づくことができた (2)</li> <li>・利用者のいろいろなつながりを発見できる (3)</li> <li>・今まで気づけなかったことに気づくことができる (2)</li> <li>・一つひとつの情報をつながりとして理解することができる (3)</li> <li>・手順にそって考えていくうちに、気づけなかったことがみえてくる</li> <li>・情報の少なさを再発見できる</li> </ul>	なし
活用の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シートを使うことによって利用者の良いところを通じて関わりをもってみたいと思うことができる</li> <li>・利用者や家族とのコミュニケーションツールとしての活用できるのではないかと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初の取りかかりが難しく、見本があるとわかりやすい</li> <li>・説明を聞けばわかるが、他のスタッフにシートの活用方法を伝えることは難しい</li> <li>・慣れないと、どこに何を書けばよいかわからない</li> </ul>

ニングシートを活用することによって、今まで気づけなかった利用者の問題に気づくことができたことや、利用者の持っているつながりの発見やその理解が深まったこと等、介護支援専門員としての新たな気づきを得る機会になることもあげられた。また、プランニングシートの活用により利用者のポジティブ面・ネガティブ面が明確になることや、ケアマネジメントの展開ツールとしてわかりやすいことが利点としてあげられた一方で、説明がないと記入の仕方がわかりにくいことや、研修に参加していない他のスタッフに伝えることが困難であること等の課題があげられた。このように、プランニングシートは、これまでのアセスメントシートでは捉えることができなかった多様な社会資源を活用する視点や、そのような社会資源を利用者主体に活用することを導くツールであると考えられる。

## V まとめ

調査結果から、施設ケアマネジメントプランニングシートは、これまでの施設介護支援員専門研修で課題とされていた ICF モデルで捉えたアセスメント情報からのプランニングへの展開をスムーズに行うことができることが明らかになった。また、活用することによる利点としては、①個別ケアプランが作成しやすいこと、②利用者のその人らしさを見つけやすいこと、③ニーズを導きやすいこと、④多様な社会資源をケアプランにあげることができること、⑤シートの記入を進めていくことによってケアプラン作成がスムーズになること等が示された。このようなことから、プランニングシートは施設ケアマネジメントのプランニングにおいて効果的なツールであると考えられる。しかし、このプランニングシートを有効に活用するには以下の課題があげられる。

まず、プランニングシート活用マニュアル作成に向けての課題である。調査結果から、プランニングシートの活用方法や記入例の必要性が示された。これについては、プランニングシートの意義や項目の説明、活用の方法や具体的な手順等、わかりやすい説明が必要になると考えられる。プランニングシートの記入がスムーズになれば、さらに効率よく活用できると考えられるため、このプランニングシートに付随するものとして整備していくことにする。また、もう一つの課題としては、プランニングシートを活用しての施設種別研修、市町村単位での研修プログラムの開発に向けての課題である。調査結果から、プランニングシートが利用者固有の多様な社会資源を活用することができるツールであることが明確になった。施設利用者が入所している特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、介護療養型医療施設、認知症対応型生活介護等の施設にはそれぞれの施設機能と役割がある。施設種別の研修を行うことにより、このような施設の特性を活かした社会資源活用が見出せるのではないかと考えられる。また、調査からプランニングシートの活用により、インフォーマルな社会資源をとらえることができることが示された。それぞれの地域にはそれぞれの特性があり、活用する地域資源も様々である。そのため、市町村単位での研修を行うことにより地域資源を活用した施設ケアプランを作成することが可能になるであろう。そして、このような視点は施設から展開する地域包括ケアの具現化を導く手がかりになるのではないかと考えられる。今後は研修での活用を積み上げながら、シートの汎用性を高めるとともに実践ツールとしてのさらなる可能性についても検討を進めていきたいと考えている。



- 1) 介護支援専門員（ケアマネジャー）の資質向上と今後のあり方に関する検討会『介護支援専門員（ケアマネジャー）の資質向上と今後のあり方に関する検討会における議論の中間的な整理』厚生労働省 2013.1.7 3-5 頁
- 2) (社) 日本社会福祉士会編 『ケアマネジメント実践記録様式Q&A』2011 4 頁
- 3) 大川弥生『介護保険サービスとリハビリテーション-ICF に立った他自立支援の理念と技法』中央法規 2004 年 3-4 頁
- 4) 同書 5-9 頁
- 5) 諏訪さゆり編 『ICF の視点に基づく施設・居宅ケアプラン事例展開集』日総研 2006 年 17 頁